

## 第25回

## 第3章 現代を生きる人間の倫理

## 人間と言語をどう考えるか

## 今回学ぶこと

西洋の近代思想の多くは、理性への信頼の上に成り立ち、理性中心主義、人間中心主義を特徴にしていた。しかし、科学技術の急激な発達や、近代化にともなう社会のあり方の変化は、近代的なものの見方・考え方の問い直しにもつながった。また、近代的な理性への反省は、理性的思考をささえる言語についての考え方も問い直すことになった。ソシュールの言語学、レヴィ-ストロースの構造主義、フーコーの権力論について理解することを通じて、人間と言語についての考え方が、どのように問い直されたのか、考えを深める。



講師

小林和久

## ■■ ソシュールの言語学 ■■

スイスの言語学者ソシュールは、19世紀後半から20世紀の初めにかけて活躍し、規則のまとまりとしての言語体系である「ラング」と、実際の発話行為である「パロール」との関係に注目して、言語がどのように人間の考え方を規定しているか、探究した。ソシュールは、言語という記号は、他の記号と違って、表現（シニフィアン）と意味内容（シニフィエ）とを兼ね備えた、二重の存在だと考える。ソシュール以前は、言葉とは、もともと存在していた事物や概念をあらわす記号だと考えられていたが、ソシュールは、混沌とした世界を区分けして、わかりやすくする働きをするのが言葉であると考え。つまり、ソシュールの思想によれば、私たちが使う言語に先立って世界の事物があるのではなく、言語の使用によってはじめて世界が区分けされ、事物や概念が理解されていく、ということになる。

## ■■ レヴィ-ストロースの構造主義 ■■

20世紀後半のフランスでは、構造に注目して考えるという、ソシュールが示した方法が、言語学以外にも広く応用されていった。そのような思想は、近代への反省としても展開し、「構造主義」と呼ばれる。構造主義とは、人間の奥底に普段は意識されない構造があり、それが人間のあり方を決めていくとする思想である。その提唱者レヴィ-ストロースは、人類学者としてブラジルに渡りアマゾン川流域の先住民の調査から、人間や社会のあり方について新しい考え方を説いた。彼は、西洋近代の「理性中心主義」や「人間

中心主義」という考え方を批判し、神話的な考え方を特徴とする未開社会の「野生の思考」は、西洋近代の科学的思考に劣るものではなく、両者に優劣はつけられない、と考えた。

### ■ ■ フーコーの権力論 ■ ■

フランスの哲学者フーコーは、狂気や性や刑罰などがこれまでの西洋社会でどのように扱われてきたかについて研究しながら、人間の考え方やあり方を決めている無意識的な構造を明らかにしようとして、人間を規格化する権力のはたらきについて考察した。そして、そのようなはたらきをする権力は、監獄や軍隊、工場、病院、学校など、近代社会では至る所に現われていると説く。フーコーによれば、私たちは自分自身が自由に考えて行動する、主体性をもった人間だと思いついでいるが、実際は、その時代やその社会に特有の枠組みに支配され、その枠組みの上でしか、物事をとらえることができないという。



#### ◇ コラム ◇

今回学習したレヴィ-ストロースに影響を与えた人物として、フランスの文化人類学者マルセル・モース（1872～1950）がいます。モースも未開社会の行動パターンを分析して、それがもつ「知恵」に注目します。彼は、北米の先住民やポリネシアなどの部族、また、古代ローマやゲルマンの法を調べて、「贈り物」「贈与」のもつ意義を強調します。北米の先住民社会には「ポトラッチ」という、贈答の儀式があり、これは、より多くの贈り物を与えようとする競争のような儀式です。贈り物をしないことは部族のマナーに反することで、贈られた方は必ず受け取らなくてははいけません。さらに、贈られた方は「お返し」を必ずしなくてははいけません。

近代の「合理的思考」からすると、無駄なことのようにも思えるかもしれませんが、社会の中で富をめぐる争いが避けようとする「知恵」と考えることもできます。モースは、贈与によって人間は相互に交流し、助け合っていたと、その道徳的な意味も強調して、近代的な貨幣経済を批判します。現代では、選挙のときなど「贈り物」が問題になることもありますし、日常生活での「プレゼント」などは自発的に行うものなので、モースの主張とは異なるものかもしれません。社会の中で伝統的に行われてきた慣習について、その意義をいろいろな角度から考えてみることも面白いですね。